

終末期の治療方針話し合い

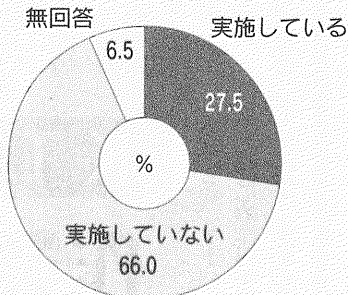
患者の意思尊重進まず

「ACP」実践わずか3割弱

厚労省調査

医師の66%が、終末期の患者や家族などと繰り返し話し合って治療内容を決める「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)」を実践していないことが23日、厚生労働省の調査で分かった。医療現場でACPの普及が進んでいない実態が浮かんできた。こうした調査を踏まえ、厚労省は2018年3月にも、ACPの推進などを盛り込んだ終末期の治療指針を改定する方針。

医師のACPの実施状況



(注) 厚労省の調査を基に作成

同日、改定案が有識者検討会で大筋了承された。各自治体などに通知する。高齢化による多死社会を見据え、患者本人の意思を尊重するなど終末期医療の質向上を目指す。ACPは末期がん患者や高齢者などがいざれ意思決定が難しくなる場合に備え、家族や医師らと交えて何度も話し合い、今後の治療の内容や受け場所などを決める手法。欧米では1990年代から普及している一方、日本での導入は一部の医療機関にとどまっているという。

同省が17年12月、無作為に抽出した医師4500人(回収率24.4%)を調査した。医師は「終末期医療の指針を巡っては、厚労省が07年に「患者本人の意思決定を基本に、医療行為の開始や中止は医療・ケアチームが慎重に判断すべきだ」と定めた。現行の指針は病院での活用を想定している。

これに対し、改定の指針は高齢者の増加で多死社会を迎えることを見据え、病院だけではなく、在宅などでも活用できるようにする。また、ACPの実践を促進するための支援策も盛り込まれる見込みだ。

を拡大。ケアマネジャーなどを含めた医療チームが患者本人の治療に対する考え方を尊重するため、ACPなどで柔軟な姿勢で患者と繰り返し話し合うことを求めている。

厚労省の担当者は「終末期医療に関わっている医師もACPを知らない医師はいる。どのように取り組みを周知していくか検討を進めていく」と話した。

大杉さん出演作
テレ東放送継続

21日に急逝した俳優大杉漣さんが出演中だったテレビ東京系の連続ドラマ「バイプレイヤーズ」(全5回)について、同局は23日、残る4、5話を予定通り放送すると発表した。

同局は遺族や共演者らの理解を得て決定したとしている。大杉さんは20日に千葉県で今作のロケに臨んだ後、宿泊先で不調を訴えた。